

<随想>杉本圭三郎さんとの出会い

長谷川, 端 / ハセガワ, タダシ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

57

(開始ページ / Start Page)

106

(終了ページ / End Page)

107

(発行年 / Year)

1998-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019997>

杉本圭三郎さんとの出会い

長谷川 端

杉本さんから声をかけられたのは、昭和三十五年六月五日、東京大学での中世文学会の折であった。その日、水原一氏の「平家物語における説話の形成」という発表があった。臆面もなく質問した私の姿を見ておられたからであろう、休憩時間になって間もなく、「杉本ですけど」といって、挨拶を受けた。私は、杉本さんが前年の「文学」八月号に発表された「太平記論―平家物語との関連において―」を読んで、

蒙を啓かれた感を強くしたので、ちようど書き始めていた「北野通夜物語にあらわれた政道観」(文芸研究九昭34・12)の冒頭近くに早速引用させていただいた。修士論文は別として、これが第一論文だったので、論文から想像される杉本さんの印象には強烈なものがあった。太平記は平家物語と同じように語り物であったと言われているけれども、聴くという享受形態においては同一であるようにみえながら、語りの方法においては質的な相違がある、「つまり、「晴眼の談義僧」による談義を基本としている点に太平記の特色があるという論旨であった。「歴史過程に批判的に対立する太平記の中核的な構造」を追求なされた論文で、ここに見られる軍記物語研究者としての視点は今日まで一貫しており、その意味からも、恐らく杉本さんご自身も思い入れのある論文であろう。ところで、その時、私は、ある程度年輩の方を論文から想像していたので、目の前の杉本さんとの落差に驚いたのであった。論文を読んでの感想を申しあげると、「あれは卒業論文をまとめなおしたものです」と、平然として言われ、改めて顔を見直した記憶がある。何てすごい人なんだろうと思った。杉本さんの方でも私の論文を読んでいて、院生だとは

思っていないなかったとおっしゃり、大笑いになった。何とも強烈な第一印象であった。

この夏、熊野の青岸渡寺で行われた研究会に出席して、朝早く、杉本さん、山田昭全氏、大森北義氏と四人、勤行に参加した後、風に吹かれながら記念撮影(?)をし、山脈を見渡していた時に、杉本さんの貌をゆっくり見る機会があった。髪の毛は半白になっていているものの、柔らかそうな髪をふわっと分けた髪型は昔と同じであった。この人は文学と歴史の間を自由に泳ぎ続けてきた方だなあと、久しぶりに熊野を訪れた感慨を込めて眺めたのであった。表現と思想史の流れを大きな軸にした研究書『軍記物語の世界』をものにしておられる杉本さんの、個性あふれる人間性の高みに少しでも近づけたらと、気分を引きしめた朝であった。

(はせがわ ただし・中京大学教授)

